

全国の園長先生に  
無料でお届けしています

子どものよりよい育ちをともに考える

# これからの 幼児教育

2021 Spring

春

特集

コロナ禍で顕在化した課題をともに考える

## 新しい園づくりに 向けた第一歩

インタビュー

全国から寄せられた園の悩みへのアドバイス

白梅学園大学名誉学長 汐見稔幸

文部科学省と厚生労働省の検討会から考える

保育の「質」を向上させるヒント

京都教育大学教授 古賀松香

園の取り組み事例

フレーベル西が丘みらい園（東京都・私営）

データ紹介

～Cedep・ベネッセ教育総合研究所合同調査より～

## 現代の「チーム育児」における 園の役割とは

解説

東京大学大学院教授・Cedepセンター長 遠藤利彦

## CONTENTS

### 特集

- 1 コロナ禍で顕在化した課題をともに考える  
**新しい園づくりに向けた第一歩**
- 2 **インタビュー**  
全国から寄せられた園の悩みへのアドバイス  
**コロナ禍の今だからこそ  
子どもの育ちのために考えておきたいこと**  
白梅学園大学名誉学長 汐見稔幸
- 8 **園の取り組み事例**  
**園の理念を守りながら、新しいツールを活用し、  
より豊かな園をつくる**  
フレーベル西が丘みらい園（東京都・私営）
- 12 **インタビュー**  
文部科学省と厚生労働省の検討会から考える  
保育の「質」を向上させるヒント  
**これからの社会に向け、議論が加速する  
保育の「質」を高める園づくり**  
京都教育大学教授 古賀松香

### データ紹介

- 16 ~ Cedep・ベネッセ教育総合研究所合同調査より~  
現代の「チーム育児」における園の役割とは  
**乳幼児期の社会情動的発達を支える「チーム育児」**  
東京大学大学院教授・Cedepセンター長 遠藤利彦

本誌をお手にとっていただき、ありがとうございます。  
今号では、前号のアンケートに寄せられた園の先生方のお声をもとに、幼児教育の本質を見つめ直しながらこれからの園づくりを考える特集をお届けします。インタビューやデータ紹介の内容を、少しでもお役立ていただければ幸いです。  
前号に引き続き、すべての取材は対面ではなくウェブ会議システムでの実施となりました。表紙はイラストで、春の喜びと子どもの存在がもたらすパワーによる希望・明るさが表現されています。コロナ禍での不安などが続きますが、少しでも晴れやかな気分を感じていただければと思います。

「これからの幼児教育」編集部

### STAFF

編集発行人/岡田晴奈 発行所/(株)ベネッセコーポレーション  
印刷製本/凸版印刷(株) 監修/北野幸子(神戸大学大学院准教授)  
企画・制作/仙田由紀子(ベネッセ教育総合研究所)  
編集協力/(有)ベンダコ、丹羽三千代、菊池健(mananico) 執筆協力/二宮良太  
表紙+特集扉デザイン・イラスト協力/へんな優

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。  
また、敬称略とさせていただきます。  
※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。  
©Benesse Corporation 2021





コロナ禍で顕在化した課題をともに考える

# 新しい 園づくりに向けた 第一歩

長引くコロナ禍で<sup>いやおう</sup>否応なしに変化が求められる中、各園では不安を抱え、試行錯誤を重ねながら保育をされているのではないのでしょうか。園の先生方に悩みをうかがった本誌のアンケートには、さまざまな課題が寄せられました。折しも、文部科学省と厚生労働省でも、保育の質向上に関する検討が行われています。

「変化」ととどまらず、コロナ禍の先の未来に向けて「進化」し、保育の質向上を実現していくためにはどうしたらよいのか。今号では、新たな園づくりのための第一歩をどのように踏み出していけばよいか、識者の先生方の提言や園の事例をもとに考えていきます。

## Interview

全国から寄せられた園の悩みへのアドバイス

# コロナ禍の今だからこそ 子どもの育ちのために 考えておきたいこと

コロナ禍の保育現場では、試行錯誤の実践が続いています。本誌の読者アンケートでは、特に課題に感じるものとして、「行事のあり方」「ICTの導入」「保護者とのコミュニケーション」「保育者の確保・定着・育成」などが挙がりました。さまざまな困難や制約がある中、そうした課題をどのようにクリアすればよいのでしょうか。白梅学園大学名誉学長などを務める汐見稔幸先生に、コロナ禍の今だからこそ、子どもの育ちを支えるために考えたいことをうかがいました。

\*本記事は2021年1月下旬に取材しました。



汐見稔幸 (しおみ・としゆき) 先生

白梅学園大学名誉学長、東京大学名誉教授。専門は教育学、教育人間学、育児学。日本保育学会会長、全国保育士養成協議会会長、社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員長などを務める。著書に『汐見稔幸 こども・保育・人間』（学研プラス）、『さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか』（小学館）など。

## 行事の あり方

「立派な姿」ではなく、子どもの日常の「リアルな育ち」を伝えることで、保護者の理解へとつなげる。行事の開催もその延長線上に位置づけ、子どもの主体性を引き出せるようにする。

## 行事に追われる状況を見直し 目的や効果を踏まえて精選を

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、従来の保育の見直しが迫られ、保育現場に混乱や戸惑いが生じる状況が続いています。現場のみなさんが特に課題と感じているテーマを中心に、今、私たちにできること、そして、この先の保育のために考えておきたいことをお話しします。現状で、

いかに子どもたちの育ちを支えていくことができるかを一緒に考えていきましょう。

密閉・密集・密接の「3密」を避けるため、行事を廃止・縮小する動きが広がっています。いまだ感染収束の時期が見えない中、今後の行事の方針を決めあぐねている園は少なくありません。

この問題を考える上で前提として知っておいていただきたいのは、日本の園は世界的に見ても非常に行事が多いという事実です。運動会も、短時

間のスポーツイベントのような形で行われることはありますが、保護者を招いて大々的に行う国は多くありません。

現在、園で実施している行事はすべて必要なものでしょうか。「行事を通してこんな力を育てたい」といった園の方針もあれば、「長年続けてきたのでやめづらい」といった、やや消極的な理由で継続しているものもあるかもしれません。一般に組織では新しいことを始めるより、やめるほうが難しく、1つ増やしたら1つ減らさない限り、内部で働く人の仕事量は増え続けることになります。

多くの日本の園では、行事を柱の1つとして年間計画を組み立てます。運動会に発表会と、多くの行事がある園では、子どもは練習に、保育者は準備に、忙しい日々を送ることになるでしょう。

ところが、コロナ禍により、期せずして行事ができない状況になりました。すると、「行事がなくても、子どもの育ちに大きな変化がなかった」「運動会を短縮したら、むしろ保護者の反応がよかった」といった話がたくさん出てきました。そして、「この行事は、そもそも何のために実施していたのか」「これまで通りのやり方を続けてよいのか」といった議論につながっています。

日本中の園で一斉に行事のあり方を見直すのは、恐らく戦後初めてのことでしょう。この機会に各園で行事の目的や効果をしっかりと議論し、精選していくことは、これからの保育を考える上で非常によいことだと思います。

## 「リアルな育ち」を伝え 子どもの主体性を育む保育へ

園で行事に関する議論を進める際に大切にしたいのは、子どもの育ちを中心に置くことです。行事の内容を保育者が一方的に決定し、それに従って子どもが練習を重ねるというやり方では、子どもも主体とはいえません。最終的に形を整え、子どもの「立派な姿」を見せても、そこには子どもたちの「やってみたい」といった思いが乗りづらいからです。

一方で、普段の子どもはさまざまな遊びや活動



に主体的にかかわり、楽しみながら成長しているのではないのでしょうか。まずは保護者に、そうした子どもの日常の姿を見せる機会を増やしていくとよいと思います。その際に気をつけたいのは、子どもがどのように育っているかという「リアルな育ち」を伝えることです。例えば、ドキュメンテーションなどを通して伝えてもよいでしょう。

そして、行事も、必要なものを精選しながら、「自分たちが普段していることの中で保護者に知ってもらいたいことを見せる場」として位置づけるのです。そうした活動であれば日常の保育とのつながりができ、子どもたちは「こんなことを見てもらいたい」「みんなで工夫して飾りつけをしよう」などと豊かな発想力で意欲的になるものです。その過程でさまざまな力が育ちますし、保育者の準備の負担感も軽減されるでしょう。

今後、子どもたちに育みたい力を考えると、子どもの主体性を尊重する保育はとても大切です。コロナ禍による行事の再考は、くしくも時代の流れと重なっていたともいえるでしょう。

「保護者が行事を楽しみにしている」と、行事のあり方を変えることに消極的な声もあるかもしれませんが、たしかに保護者にとって、行事は子どもの姿を見られる数少ない場でした。しかし、そもそも日常の保育が見えづらかったのです。大々的な行事でなくても、日常の子どもの「リアルな育ち」を伝える機会をしっかりと設けることで、きっと保護者の理解を得られるはずです。

## ICTの 導入

まず、心理的なハードルをクリアすることが大切。ICTを取り入れてみると、便利で快適に研修や日常の業務を行うことができ、効率化にもつながる。

### 導入して便利さを知れば 自然と取り組みは進んでいく

以前より、園内改革や業務効率化に向けてICTを導入する園は増えてきましたが、コロナ禍でその動きは加速しています。しかし、この分野は園による差が大きく、どこから手をつけてよいかわからずに、取り組みが進まないケースも多いようです。

最初の一步を踏み出せない大きな要因は、心理的なハードルです。長年続けてきた手書き文化への愛着にコンピュータへの苦手意識もあいまって、なかなか導入に踏み切れない状況が見られます。

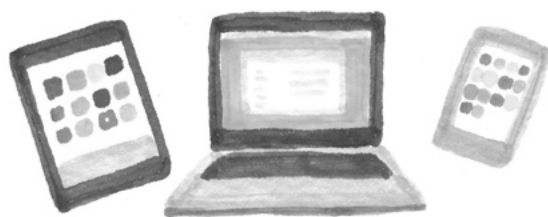
2020年春に1回目の緊急事態宣言が発出されたとき、私も講師として参加を予定していた研修の多くが中止になりました。関係者にはオンラインによる研修を呼びかけましたが、それまでICTを導入していなかった園からは「やり方がわからない」「機器がそろっていない」といった消極的な答えが返ってきました。ところが、やり方を案内して実施してみると、異口同音に「思ったより簡単だった」という感想が聞かれたのです。このように心理的なハードルさえクリアできれば、ICTはより便利で快適に進化していますから、意外と容易に活用できることも多いものです。

オンライン研修でも、遠隔地の人も気軽に参加できるなど、だれもがオンラインの利点を感じました。そうになると、積極的に利用しない手はありません。例えば、園内研修に活用すれば、一度帰宅して夕食後に家から参加することもできます。多忙ゆえに研修の時間を確保しづらかった園では、ICTをうまく取り入れることで、研修が実施しやすくなるでしょう。

### 日常業務の効率化が 保育の質の向上をもたらす

日常業務も同様で、心理的なハードルさえ乗り越えれば、意外と簡単にICTを取り入れられます。保育者の多忙さの要因の1つは書類作成ですが、それを手書きからパソコンなどに切り替えると一気に効率化します。例えば、保育記録をフォーマット化し、各部屋にパソコンを置いて、子どもの印象的な姿が見られたときにこまめにコメントを入力したり、写真を取り込んだりすると、夕方にはほとんどできあがります。こうした記録は、子どもの育ちを保護者に伝えるドキュメンテーションとしても活用できるでしょう。

さらに、頻繁な会議も多忙化の要因です。単に保育者間の確認がとれればよい場合などは、オンラインで伝達して、チェックをつけてもらう仕組みにすると、職員会議の時間短縮や回数減につながります。そうした省力化により生み出された時間を、保育者同士が子どもの姿を語り合ったり、保育について議論したりする時間に充てることで、保育の質はますます高まっていくでしょう。



## 保護者との コミュニ ケーション

孤立しやすい状況のため、保護者に寄り添い、できるだけ話を聴くようにする。オンラインツールなどを用いた、新しいコミュニケーションの形が構築できるとよい。

### 園と保護者をつなぐ 新たな手法の検討を

コロナ禍により保護者会や個別面談が実施できなくなったり、送迎時にゆっくり話せなかったりして、保護者とのコミュニケーションが難しくなっています。現場のみなさんが保護者との関係構築に苦慮される気持ちはよくわかりますが、一方で保護者の側にも気持ちの変化があるようです。

保育者は医療従事者などと同じく、社会を支えるエッセンシャルワーカーです。この大変な状況下で必死に頑張る保育者の姿に対して、多くの保護者が感謝の念を抱いているという話を耳にします。確かにコミュニケーションの手段は制限されていますが、そうした中でも保護者との間に心の深い部分での信頼関係が築かれつつあるのだと、私は感じています。

その一方で、新しいコミュニケーションのあり方を考えていくことも大切です。オンラインツールを活用した保護者会や個人面談を実施する園もありますが、保護者と必要な情報を交換して、良好な関係性を保つ上でよい方法といえるでしょう。

### 保護者が孤立しやすい状況で 子育て支援の必要性が高まる

コロナ禍では、子育て支援もより重要になっています。外出自粛で家にこもり、保護者同士が気軽に集まるのも難しい状況で、気持ちが減入り、大きなストレスを感じている保護者が少なくないと考えられるためです。そうした保護者の不調は、子どもの育ちにも影響を及ぼしかねません。

保護者に対して私たちができる支援は、個々の様子を注意深く見取り、心に寄り添い、話を聴く

ことだと思えます。保護者の表情が曇っていると気づいたら、「お話を聴きますよ」などと声をかけるとよいでしょう。「悩みを話せる存在が近くにいる」と感じるだけでも、保護者の気持ちは楽になるはずです。ただし、状況を改善する力になりたいという思いから、気持ちに余裕がない保護者に対して「こうしたほうがよい」といったアドバイスをすると、逆に追い詰める場合もありますから、慎重さも必要になるでしょう。

対面で話をする時間が取りづらい場合は、オンライン会議室を設定して希望する保護者に入ってもらい、1対1で悩みを聴くという方法も考えられます。また、保護者同士が集まって相談し合える場をオンラインで用意してもよいかもしれません。大切なのは、保護者が孤立しないように、園と保護者や、保護者同士をつなぐサポートをすることです。



## 保育者の 確保・定着・ 育成

社会人で保育者を志望する人は増加傾向。年齢や経験に関係なく  
対等に語り合える関係づくりをして、居心地のよい職場をめざし、  
入職した保育者の定着へとつなげる。

### 保育者を志望する社会人には キャリア形成のサポートを

コロナ禍以前から、保育者の確保は多くの園で課題でした。一方で、保育が子どもの育ちに与える重要性が社会に認知されたり、先行きの不透明な社会で資格をもつことの心強さがあったりなど、さまざまな理由により保育者をめざす人は、特に一度社会に出た人の中で増加する傾向にあります。新卒の学生だけではなく、ぜひ、既卒の社会人にも目を向けてください。資格をもちながら保育の仕事をしていない人もいますし、社会に出てから「やっぱり保育者になりたい」と、意欲をもって新たなキャリアに踏み出そうとする人も少なくありません。

それでも、待っているだけでは人材は集まりませんから、各園でさまざまな工夫をするとよいと思います。例えば、園のホームページなどで、「これから保育者をめざしたい人の相談に乗ります」と打ち出して人材を集め、手厚くサポートをしながら育てていくという方法も考えられます。



### 子どもの姿を中心に置けば 経験にかかわらず対等に語り合える

保育者の定着も多くの園に共通する課題の1つです。保育者の退職理由としてもっとも多いのは、人間関係の悩みです。若い保育者は理想をもって入職しますが、「想像していた保育とは違う」など、現実の壁にぶつかることも多いものです。その際、周囲の先輩などに率直に悩みを話せる環境がないと、1人で悩みを抱え込んでしまいます。

保育者の成長を温かく支える環境をつくるためには、園長やサブリーダーのふるまい方が重要です。保育者の悩みに耳を傾け、「私も同じことに悩んだよ」などと共感し合える人間関係であれば、そこは居心地のよい職場になります。

そうした人間関係づくりでもっとも大切になるのは、ベテランや若手が年齢や経験に関係なく対等に語り合える場を設けることです。そこで、子どもの姿を自由に語り合うのです。1日5分でよいので、その日に「子どもから学んだこと」「面白いと感じた姿」など、肯定的な内容を1つずつ出し合って語り合う習慣をもちましょう。その中で、それぞれの保育者のよさが見えてきますし、若手の悩みに周囲がアドバイスをしたり、逆にベテランが新たな刺激を受けたりすることもあるでしょう。園内にそうした語り合いの文化ができると、人間関係がよくなって保育者の定着につながるとともに、子どもの見方が深まって、一人ひとりの保育者に成長をもたらすはずです。

また、コロナ禍においては、保育者も大きなストレスを感じています。「保護者とのコミュニケーション」でお話しした内容と同様、保育者一人ひとりの話をよく聴いて、精神的なサポートをすることも大切にしてください。



## コロナ禍に おける保育

身体面では、子どもが自然に分散できるような環境づくりを工夫する。精神面では、距離が近づくよう、共感的なかわりを大切にする。

### 人との距離が離れる今だから 精神的な距離を近づける

新型コロナウイルスに対するさまざまな対策が、子どもの育ちにどう影響するかを心配する保育者は多いでしょう。例えば、保育者がマスクを着用すると、表情を通じたコミュニケーションが困難になったり、乳児が言葉を覚える過程で保育者の口の動きを模倣しづらかったりといった、さまざまな影響を懸念する声が聞かれます。そのため、場面に応じて保育者がマウスシールドを使用して、表情を見えやすくしている園もあります。

この問題が難しいのは、保育の現場では子どもとの深いかかわりが避けられないことが関係しています。今後の感染動向を注視していく必要はありますが、子どもの感染者の報告数は少なく、感染しても重症になりづらいといったデータもあります（2021年1月時点）。必要以上の接触には気をつけなければなりません。接触に過敏になるあまり、子どもに悪影響が生じないようにも配慮しましょう。例えば、子どもが泣きながら近づいて

きたら、コロナ禍の状況であっても、優しく抱っこをして話を聴いてあげるべきだと、私は考えています。

ただ、子どもが1か所に集中せず自然と分散するような環境づくりは心がけるとよいと思います。例えば、園庭のあちこちに、ドラム缶やタイヤ、ビールケースなど、子どもの興味を引きそうなさまざまな可動遊具を置いておくと、それぞれの場所で多様な遊びが発生します。屋内でも密集して一斉に活動するのではなく、興味をもとに形成された小グループで、多様な活動が展開される環境をつくりましょう。

コロナ禍では、いつも以上に子どもに対する精神的なケアにも力を入れてほしいと思います。世の中では、「ソーシャル・ディスタンス」として人同士の物理的距離を保とうとしています。しかし、子どもは大人にくっつくことで精神的な安心感を得るものです。物理的距離が生まれやすい今だからこそ、精神的な距離を近づけて、子どもに対する共感的なふるまいや言葉かけを意識していただきたいと思います。

### 保育者の方へのメッセージ

子どもたちは、新型コロナウイルスの問題に対応する大人の姿を目の当たりにしています。大人がネガティブな態度や発言を続けると、子どもたちは未来を暗いものと捉えて、前向きに生きていく夢が育まれにくくなるのではないかと心配しています。

たしかに新型コロナウイルスの収束は難しいですし、それ以外にも世界にはさまざまな問題が山積しています。だからといって悲観的な側面ばかりを伝えるのでは

なく、自分たちがやりたいことやできることを増やして、夢を実現する喜びを体験できるようにすることが大切だと考えています。料理ができるようになったり、植物を育てたり、そんな小さなことでよいのです。小さな成功体験を積み重ねることで、世界を少しずつ変えていける。子どもたちには、そうした感覚を育んでいただきたいと思います。その意味では、保育とは未来の人類や社会を育てる営みにほかなりません。保育者のみなさんもこの仕事に誇りと自信をもち、少しずつでも思いを形にしていけるように頑張ってくださいと思います。

フレーベル西が丘みらい園 (東京都北区・私営)

# 園の理念を守りながら、 新しいツールを活用し、 より豊かな園をつくる

お話ししてくださった  
先生



フレーベル西が丘みらい園  
園長  
汐見和恵先生

## 取り組みのポイント

- コロナ禍においても、一人ひとりを大切にするという保育理念の実現を、一貫してめざす。
- 行事は形態を再考したり、オンラインツールを活用したりして、柔軟に対応する。
- 保護者とのコミュニケーションや保育者研修に、オンラインツールを活用する。
- 保護者とは日頃から強い信頼関係にあるため、コロナ禍の大変な状況も率直に伝えて、ともに困難を乗り越える。

## 子どもが自分自身を育てられるように、一人ひとりを大切に

### 子ども主体を徹底して 保育のあり方や保育環境を工夫する

フレーベル西が丘みらい園は、株式会社フレーベル館が、子どもが育つ園を本気で作ろうという思いをもって、2018年に開園しました。その保育理念は、「一人ひとりが大切にされる園」という言葉に集約されます。開園から3年間、汐見和恵園長を中心に、保育理念をいかに具体的な保育に落とし込むかを話し合いながら試行錯誤してきました。汐見園長は次のように説明します。

「私たちがめざすのは、子どもが自分自身を育てられるような保育です。保育者が一人ひとりの思いや興味・関心に寄り添い、1人の人間として尊重することで、子ども自身が主体的に探究して知を獲得したり、体験を通して感性を身につけたりして、人とのつながりの中で学んでいきます」

日常の保育は一斉型の活動ではなく、子ども同

士が「今日は何をしようか」「どこで遊ぼうか」などと話し合い、さまざまな遊びが同時に展開します。保育者は子どもたちがそれぞれの思いを実現できるようにサポートします。保育環境にも多様な遊びを生み出す工夫が随所に見られます。個々の興味に沿って遊びに集中できるように、保育室をついたてで仕切ったり、園庭には築山や土管のトンネルを設置したり、四季折々の植物の成長を楽しめるガーデンをつくったりして、子どもが居場所を見つけやすい配慮をしています。

毎朝の集会で見られる子どもの姿にも、園の保育方針がよく表れています。開始時間に合わせて集まる子どもが多い中、遊びが一段落してから参加したり、最後まで集団に加わらず離れた場所で歌だけ一緒に歌っていたりする子どももいます。

「子どもの思いや状況はさまざまなので、参加するタイミングはそれぞれが決めてよく、参加しない自由もあると考えています。『9時に必ず集まる』

ことを保育者が当然と考えてしまうと、いろいろな参加のしかたがあるという見方ができず、結果として子どもを否定してしまいます」(汐見園長)

## 職員会議でエピソード記録を公表 保育者の共通理解と資質向上を図る

そうした保育を丁寧に実践するためには、保育者が一人ひとりの子どもの思いをしっかりと捉え、それぞれに合った援助を行うことが欠かせません。

「2018年の開園時には、さまざまな保育経験者が集まる状態だったため、まずは保育理念とそれを具現化するための保育のあり方について、共通理解を図る必要がありました」(汐見園長)

そのために開園時から続けているのが、月1回、2人の保育者がそれぞれエピソード記録やドキュメンテーションなどをもとに、子どものエピソードを発表する取り組みです(写真1)。発表者は、エピソードとともにそこに見られた子どもの育ちと自身の学びを述べ、参加者全員が感想を語ります。さまざまな視点から子どもの姿を捉えられるように、調理師や事務員などの職員も参加します。

「一人ひとりを否定せずに尊重するという姿勢は、保育者に対しても同様です。発表者の保育のあり方ではなく、子どもの姿を語り合うので『とてもすてきな姿が見られたね』『そこに着目したのがすごい』などと肯定的なメッセージを送り合い、子どもの見方を深めていきます。保育の喜びとめざす保育の考え方を共有しながら、保育者同士の関係づくりにも力を注いできました」(汐見園長)

子ども一人ひとりの思いに基づく援助に注力できるように、業務の効率化も推進しています。登降園管理や保護者への個別連絡を行うICTシステムを導入し、園だよりや給食献立表をデジタル画面で送信したり、保護者が誕生会や行事の写真をダウンロードできるようにしたりしています。

計画や記録類も、各クラスに設置したパソコンを使って、保育者の手が空いた時に作成できるようにしています。月案と週案は開園当初から試行錯誤を続けており、現在は月案の下に4週間分の週案をつけることで、保育の流れを把握しやすく



写真1 毎月行うエピソード記録やドキュメンテーションの発表は、園理念の共有、保育者の資質向上、さらには子どもの姿について前向きに語り合う園文化の醸成など、多くの効果をもたらしています。

するとともに省力化につながる作りをしています。毎日のクラスごとのドキュメンテーションは、担任がパソコンを使って30分ほどで作成しますが、このドキュメンテーションを保育日誌の活動内容と兼ねることで、保育者の負担を軽減しています。

同園ではICT機器を保育にも活用しています。汐見園長が海外出張の際に画面越しに子どもとやり取りをしたり、同時期の北海道と沖縄の動画を見せて地域性の違いをイメージできるようにしたり、外出時に子どもがカメラを持って自由に撮影できるようにして作品を展示したりなど、保育の可能性を広げるさまざまな試みを行っています。

## 行事は内容や場所を再考し オンラインによる実施も

コロナ禍においても従来の園の方針に変更はありません。2020年春の緊急事態宣言による登園自粛を経た後も保育内容はほとんど変えず、保育者は状況に応じて表情が子どもに伝わるように透명한マウスシールドを着用して保育を行っています。

行事に関しては、一部の実施形態を変更しています。もともと同園では、保護者に見せるために練習を必要とするような行事は行っていません。遊びの中から発展し、子どもが保護者に見せたいと思ったものを見てもらい、保護者自身も楽しいと思える活動にすることを重視しています。

そうした行事の1つが、自然を感じながら体を

動かして楽しむ「プレイデー」というイベントです。2020年は、人が密集する状況が生じないように場所や内容を再考し、森や原っぱを散策した後、屋外で自然物を使って作品づくりを楽しみました。

また、子どもと保護者が一緒にアート作品を制作する「親子でアート」というイベントは、2020年は子どもが散歩で拾ってくる木の枝を題材に、ウェブ会議システムを活用して開催しました。作品のイメージが湧くように、約2週間前から保育者が作った作品を保護者の目につく場所に展示し、子どもと相談しながら材料を家に持ち帰れるようにしました。当日は、講師役の保育者とともに制作し、全員がそれぞれの作品を見せ合いました。

## オンライン研修の受講を推奨し 保育者の成長をサポート

同園では、研修にもウェブ会議システムを積極

的に活用しています。登園自粛中は、保育者全体やクラス、フロアごとなど、さまざまなグループがオンラインでつながり、研修や話し合いを行いました。また、前述した子どものエピソードの発表は、毎月、保育終了後の夜間に実施しているため、これまで早番の保育者は、終業後にも待機している必要がありました。現在は、自宅からオンラインによる参加も可能にして、保育者の負担軽減につなげています。

さらにコロナ禍を機にオンラインによる外部研修が増加したことから、受講費を園が負担するなどして保育者に積極的な研修参加を呼びかけて、保育者の成長をサポートしています。

「これまでは、主に業務効率化のためにICT機器の導入を進めてきました。今回のコロナ禍で新たな取り組みとして保育者研修などにも活用することで、園運営の新たな可能性が広がったと感じています」(汐見園長)

## 今こそ保護者との信頼関係を強め、困難を乗り越える

### 保護者会や新入園児説明会に オンラインツールを活用

新型コロナウイルスの感染防止対策のため、保護者とのコミュニケーションの機会が制限される中、同園ではICT機器を、子どもの育ちを伝えることにも積極的に活用しています。

「保護者との関係を築く上でもっとも大切になるのは、保育の内容やそこでの育ちをしっかりと伝えることです。子どもが毎日を楽しく過ごし、成長していると信じられるからこそ、保護者は安心して園に預けられるのです。コロナ禍においても保護者とのコミュニケーションの手段を工夫して、保育理念や活動への理解を求め、一人ひとりの姿や育ちを伝えていくことが大切です」(汐見園長)

2020年4月の保護者会は中止としましたが、9月の保護者会はウェブ会議システムを使って実施しました。事前の問い合わせもほとんどなく、実施のハードルは想定より低かったといえます。

そうしたオンライン保護者会に対しては、「子どもが隣にいても参加できる」「平日の夜や土曜日に園に行かなくてよいので助かる」など保護者の反応はよく、その後、子育て講演会や年度末の保護者会とクラス懇談会もウェブ会議システムを用いて実施しました。さらに2021年度の新入園児説明会もウェブ会議システムで実施しました。

「小さな子どもを連れて園まで来るのは大変ですし、里帰りして出産・育児をしている保護者からは、『説明会だけのために戻らずに済んで助かった』とも言われました。オンラインツールの活用は、感染防止対策の観点だけでなく、子育て支援の新たな可能性も示していると思います」(汐見園長)

### 一人ひとりの保護者と 率直にやり取りできる関係をつくる

一方、2020年10月には、感染防止のために十分な距離を保つなどの対策をして、個人面談を実施

しました。オンラインではどうしても一人ひとりの表情や雰囲気伝わりづらいため、面と向かってコミュニケーションをとることで、保護者との信頼関係の構築とともに、保護者の不安を和らげる効果もありました。

同園では普段から、保護者との関係性づくりの土台として率直なやり取りを心がけ、保護者が気づいたことは何でも伝えてもらうようにしています。あるとき、泥遊びで子どもの服が汚れると町を歩きづらくなるため、泥遊びをする日を教えてほしいと言った保護者がいました。汐見園長は「子どもの主体性を大事にすると泥遊びをする日は決められないから、いつも汚れていい服で来てほしい」と答えながら、ふと気づいたといいます。

「私たち保育者の側に、『園からの願いは子どものためのものだから、保護者が従うのは当たり前』という前提があったのではないかと思います。思わぬところで保護者に嫌な思いをさせているかもしれないことに気づいて、それを伝えた上で、率直に保護者に謝りました。また、その経緯を他の保育者とも共有しました」

お迎え時の保護者との会話は、その日の子どもの姿を伝えながら保護者との関係性を深める機会として、大変重視しています。以前は保育室の中に入れていましたが、現在は感染防止のために玄関でのお迎えになっています。そこで、毎日、玄関に各クラスのドキュメンテーションを掲示するとともに、担任が短時間でも必ず保護者と会話をするようにしています（写真2）。こうした日頃からの

関係性があるからこそ、オンラインでのコミュニケーションもうまくいくのだと捉えています。

新型コロナウイルスの収束時期がまだ見えず、保育者に大きな負担がかかる状況が続いています。汐見園長は、その状況を保護者に率直に説明し、園や保護者が協力し合える関係性づくりにも努めています。例えば、保育者が少しでも休めるように、保護者に対して可能な日は通常より早めにお迎えに来てくれるようお願いしました。すると、多くの保護者が積極的に協力し、保育者が30分ほど早く退勤できる日もあるといいます。

「保護者を信頼しているからこそ、園の大変な状況を伝えてお願いをしました。保護者もまた、園を信頼してくれているから、協力してくれたのだと思います。そうした信頼関係があれば、困難な状況も乗り越えていけると思います」（汐見園長）



写真2 感染防止のため、夕方のお迎え時には、一度に玄関に入れる保護者を2人までとしています。その上で、ドキュメンテーションを活用するなどして、短時間でも毎日必ずコミュニケーションをとり、子どもの姿を伝えるようにして、保護者との信頼関係を築いています。

## 汐見園長から保育者の方へのメッセージ

私が保育者によく話すのは、「気持ちよく、美しく、穏やかに、暮らす」ということです。園内を整理整頓して、美しさを感じる環境を整えることで、子どもにもよい影響をもたらす園文化が形づくられますし、保育者が穏やかな気持ちで過ごせば、子どもは伸び伸びと

育つでしょう。きっと保護者も園で過ごす時間を心地よく感じて、良好な関係を築けるはずですよ。

そうした園運営における園長の役割は、一つひとつ指示を出すのではなく、めざす方向を指し示すことだと考えています。そして、保育者が動きやすいように見守り、支えながら、それぞれの個性や得意なことを生かし合える園づくりをめざしたいと思います。

フレーベル西が丘  
みらい園

2018年（平成30）年、株式会社フレーベル館が子ども主体の保育を理念として開園。保育理念に「一人ひとりが大切にされる園」を掲げる。

- ◎ 園長：汐見和恵先生
- ◎ 所在地：東京都北区赤羽西 6-2-20
- ◎ 園児数：60人（0～5歳）

# Interview

文部科学省と厚生労働省の検討会から考える  
保育の「質」を向上させるヒント

## これからの社会に向け、 議論が加速する 保育の「質」を高める園づくり

After/With コロナの時代に子どもの育ちを支えていくために、各園にはどのような保育が求められるのでしょうか。文部科学省と厚生労働省ではこれからの保育のあり方を見据えて、保育の質向上を実現するための検討会をそれぞれ実施しています(図1)。2つの検討会で委員を務める京都教育大学教育学部の古賀松香先生に、検討会での議論の内容を踏まえ、各園で保育の質向上に取り組む上でのヒントをうかがいました。

\*本記事は2021年2月上旬に取材しました。



古賀松香 (こが・まつか) 先生

京都教育大学教育学部教授。専門は、保育の質、保育学など。共編著に、『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」— 乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは』(北大路書房) など。

**Q** 今、なぜ保育の質向上が議論されているのでしょうか。検討会の目的や議論の全体像を教えてください

**A** 保育に関する議論は「量」から「質」へと変化している

これまで日本では、待機児童問題に対応するために保育の「量」の確保に向けた議論に重点が置かれてきました。その後、2015年に始まった「子ども・子育て支援新制度」のもとで、課題を残し

つつも保育の受け皿の確保が進んだことから、ようやく今、「質」に関する本格的な議論に移行しつつあります。そのため、日本の保育の質に関する取り組みはまだまだ遅れている状況です。2019年には幼児教育の無償化が始まりましたが、日本ではこの施策は少子化対策の一環として議論されてきました。一方、海外では、幼児教育の充実が国の発展を支えるという考えのもと、幼児教育の質の保障とそのため評価を一体化した上で、無償化を組み合わせた制度設計がなされています。

文部科学省と厚生労働省の2つの検討会では、新たな幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下、要領指針)のもと、いかに各園の保育の質を高めるか、

### 図1 保育の質向上を実現するための検討会

#### 文部科学省

幼児教育の実践の質向上に関する検討会

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/140/index.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/140/index.htm)

#### 厚生労働省

保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会

[https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-kodomo\\_554389.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-kodomo_554389.html)

それぞれの制度や文化に合わせた話し合いが進められています。

厚生労働省の検討会では「そもそも保育の質とは何か」というところが議論されました。そして、「保育の質は、子どもが得られる経験の豊かさと、それを支える保育の実践や人的・物的環境など、多層的で多様な要素により成り立つ」と定義されたことは大きな成果といえます。さらに、従来は保育の質というと人材確保や面積基準などの構造面に目が向きやすかったのですが、検討会では保育の内容に重点を置いた議論を進めています。一方、文部科学省の検討会では、これまでに積み上げてきた幼児教育の制度や文化をベースに、外国籍の子どもや特別な支援が必要な子どもへの対応

など、さまざまな具体的な検討を行っています。

また、いずれの検討会でも保育の質の保障に向けて、園による自己評価を充実させるしくみづくりにも力を注いでいます。その一環として、厚生労働省の検討会では、「保育所における自己評価ガイドライン」を策定し、その活用をサポートするハンドブックも作成しました。文部科学省の検討会でも、国立教育政策研究所・幼児教育研究センターのプロジェクト研究において開始されている、日本に合った評価指標案の検討状況の報告もされています。

こうした議論を通して、日本の園が抱える課題を踏まえて国や自治体による制度を見直ししながら、保育の質向上をめざしています。

**Q** 厚生労働省では、検討の過程で「子どもを中心に保育の実践を考える」という実践事例集が作られました(図2)。その項目に沿って、保育の質向上に向け、すべての園に共通する考え方をうかがいます。まず、職場の風土づくりの工夫について教えてください

**A** 子どもにかかわるすべての人の考えが尊重される対話的な風土づくりを

検討会では、対話的な風土づくりの大切さが繰り返し話題に出されました。ベテラン、そして新人の保育者、あるいは保育の実習生など、子どもにかかわるすべての人にはそれぞれの感じ方があります。そうした一人ひとりの実感をもとに自由に考えが表明でき、「私を感じたこと」と「あなたが感じたこと」が同等に尊重される雰囲気があることが、対話的な風土の基盤となるでしょう。

対話の質が高まると、自分たちの保育のよさを見つけたり、課題に前向きに取り組んだりして、

保育の内容に工夫が生まれやすくなります。一方、ベテランの意見ばかりが重視される状況では、なかなか対話は根つきません。若い保育者が「その考えは間違っている」などと否定されたら、自分の考えを述べる勇気を失ってしまうでしょう。

豊かな対話を生み出すためには、子どもの姿について感じたことなどを語り合う場をもつことが効果的です。園長先生やベテランの保育者が聞き役になり、共感的、肯定的な態度を意識すると、話しやすい雰囲気が生まれます。自分の考えを表明するツールとして付せん紙を活用するなど、ちょっとした工夫で対話は促進されます。

現在は新型コロナウイルスへの対応として、今まで当たり前のように引き継がれてきた保育や行事の再考が迫られています。どこを削り、どこを残すかという判断は園の理念に深くかかわりますから、園内で徹底的に議論する必要があるでしょう。そうした対話を通して保育を見つめ直し、語り直し、全員で共有して、子どもを中心とした保育の質向上をめざしていただければと思います。

#### 図2 厚生労働省作成の実践事例集

「子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」

##### 事例編の内容

- 1 対話的な職場風土づくりのための工夫を活かす
- 2 記録や計画、発信物の工夫を活かす
- 3 園内外の研修を活かす
- 4 環境構成の工夫を活かす
- 5 保護者や地域の人々との連携を活かす

**Q** 記録や計画、発信物などはどう工夫するとよいでしょうか

**A** 記録を計画や実践に生かすしくみづくりを

記録の取り方については、各園でもさまざまな工夫が進んでいると感じます。記録の継続のために重要なのは、記録をつらい作業にしないことです。子どもの様子を見ていて書きたいと思ったときに、サッと記録できるようなしくみを取り入れるとよいでしょう。また、記録の良しあしを評価するのではなく、保育者一人ひとりの考えをできるだけ尊重し、各園で焦点をあてて取り組みたいところに合った記録のしかたを工夫していくとよいと思います。

一方で、作成した記録が十分に活用されていないという場合もあるようです。せっかく書いた記録が役立てられないと、保育者は意欲を失ってしまうでしょう。

本来、記録は、保育計画に基づいて実践した結果、子どもにどのような姿が見られたかななどを観

察して、計画や目標の振り返りに生かすためのものです。ですから、「計画とは異なる展開になったけれど、こんな姿が見られたから次の計画を変更しよう」と、記録と計画が循環するしくみを生み出すことが大切です。決して大きな改定が必要なわけではありません。園の理念や育てたい子どもの姿を意識したときに、「何が大事なのか」や、「それが何につながっているのか」が見てわかる、書いていて実感ができる記録にすればよいのです。

園により、ふさわしい記録の形はさまざまです。ぜひ各園で、記録を見返しながら生かしているところや書きづらいつころについて対話をしてください。そして、変えたいところがあったらまずは試してみることを重ね、保育に役立つ記録を探っていくてください。

**Q** 園内外の研修のあり方を教えてください

**A** 子どもや遊びの見方をテーマとした研修に重点を

各園で保育の質を向上させるためには、保育者一人ひとりの子どもや遊びの見方を磨くことが欠かせません。研修でも、そうしたテーマを定期的に取り入れてみましょう。

例えば、あるクラスの保育の様子を動画に撮影し、みんなで共有して語り合う研修が考えられます。まず保育を担当した保育者が、どこに面白さや課題を感じたかを話し、それをもとに子どもの姿に迫りながら対話を深めていきます。

その際に注意したいのは、「保育には答えがない」という前提で話し合うことです。保育を公開する保育者に対して無用な批判をすることなく、相手を大切な存在として、尊敬の念をもって意見を述べ合うことを心がけましょう。そのように一人ひとりの感じ方を受け入れ合う場ができると、「そん

な見方もあるのか」と、保育者の視野は広がっていきます。園長先生やミドルリーダーの保育者は、保育を担当した保育者を認めて励まし、相談に乗り、保育者自身がやってみたいことを支えていたきたいと思います。

コロナ禍では集合研修が難しい状況ですが、私がかかわる京都教育大学附属幼稚園では、園長先生などが保育の様子を動画に撮影し、互いに見合う機会を増やしています。普段は隣のクラスの状態を把握しきれないことが多いので、「こんな声かけをしているのか」「子どもはこんなことを楽しんでたのか」など、それぞれが多く気づきを得ることができました。そうした園内研修を行い、身近な学びを得る機会を充実させてもよいかもしれません。



**Q** どのような環境構成が保育の質向上を支えるのでしょうか

**A** 育てたい子どもの姿を実現するための環境について議論することが大切

園内には、「以前からあるから」という理由で物が置かれているケースが見られます。まず園の理念や育てたい子どもの姿を踏まえ、既存の環境を見直しましょう。そして、目の前の子どもの状態や課題を考え、どのような遊びを充実させたいかをじっくりと話し合うと、望ましい環境構成が見えてきます。

ある園では近隣の畑での栽培活動を大切にしていたのですが、事情により畑が使えなくなりました。しかし、命を育むことや食の大切さを伝える活動は園として継続していきたいことを確認し、園庭

の真ん中を畑にすることを決めたといいます。この畑も、今後の子どもの状況や発達に合わせ、見直していくこともあると思います。

どのような遊びや活動を充実させるかを考えるときは、家庭や地域では実現しづらいことを園で経験できるようにするという視点も大切です。例えば、地域にもよりますが、異年齢の子どもたちと群れたり、自然に触れながら遊んだりする機会は減る傾向にあります。園の理念と考え合わせ、そうした遊びを園生活で充実させられたら、園に通う大きな意味の1つになると思います。

**Q** 保護者や地域の人々とはどのように連携していくとよいでしょうか

**A** 情報発信を出発点として地域全体で子どもを育む関係づくりを

新しい要領・指針にもあるように、今後、園には保護者や地域の人々との連携を強化し、家庭同士や家庭と地域をつなぐ地域コミュニティの中核的な役割を担うことが期待されています。その出発点となるのは適切な情報発信です。OECD\*の調査によると、日本の保育者は自身の仕事が「社会的に評価されていない」と感じる割合が他国と比べて高いことがわかっています。これからは、子どもの育ちや遊びの大切さなど、保育の意義をしっかりと伝えて、社会的な理解を得ていく努力がいつ

そう大切になるでしょう。家庭や地域への情報発信は、幼児教育の無償化を受けて説明責任を果たすという意味でも、これまで以上に重要です。

地域との連携強化を進める上では、国や自治体のサポートも欠かせないでしょう。京都市では、15園の公立幼稚園のすべてに学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を立ち上げ、地域全体で子どもの成長を支えるしくみづくりを進めています。そうした動きが全国的に広がることを期待しています。

### 保育者の方へのメッセージ

コロナ禍では保護者や地域の人々に幼児教育施設の大切さが改めて認識され、保育者に対して感謝のメッセージが届けられる状況も多く見られました。何が正しいのかわからず、10年後にわかる正しさがあるかもしれない

という不安の中で日々の保育をされていると思いますが、みなさんは一人ひとりの子どもの成長を支え、地域や社会に貢献するすばらしい仕事に従事されているということをお忘れなくいただきたいのです。みなさん自身の心のケアも大切にしながら仕事を楽しみ、子どもにとってよりよい保育を探究し続けていただきたいと思います。

\*経済協力開発機構のこと。世界37か国が加盟している。

## データ紹介

～ Cedep・ベネッセ教育総合研究所合同調査より～

現代の「チーム育児」における園の役割とは

# 乳幼児期の 社会情動的発達を支える 「チーム育児」

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（以下、Cedep）とベネッセ教育総合研究所は、乳幼児期の子どもから調査を開始する長期縦断研究「乳幼児の生活と育ちに関する調査」を、2017年より継続的に実施しています。今回は、3歳児期までのデータをもとに、アタッチメントや保護者の養育行動が子どもの「社会情動的発達」にどのような影響を与えているかを見ながら、母親、父親、そして保育者が連携した「チーム育児」のあり方について、Cedepセンター長の遠藤利彦先生にお話をうかがいます。

\*本記事は2021年2月上旬に取材しました。



遠藤利彦先生

(えんどう・としひこ)

東京大学大学院教育学研究科教授。同研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）センター長。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得後退学。博士（心理学）。専門は、発達心理学・感情心理学。著書に、『赤ちゃんの発達とアタッチメントー乳児保育で大切にしたいこと』（ひとなる書房）など。

## 保護者の育児へのかかわり方が変わろうとする中、 園に求められる「チーム育児」の視点

### 環境の改善は進んでいるが 父親の育児参画は十分とはいえない

私たちが行っている縦断調査は、同一の母親・父親に継続して調査を行い、子どもの生活と育ちや保護者の子育てに対する意識などの実態と変化を見ていくものです。ここでは、特に「チーム育児」「社会情動的発達」という2つの観点から、園の先生方が保護者を理解するために役立つデータと、これからの保育のあり方について考えていく際の材料となるようなデータをご紹介します。

まず、子育てにかかわる保護者の働き方について、4つのデータをご紹介します。**図1**は、在宅勤務によるテレワーク制度の有無と利用状況について聞いたものです。コロナ禍で注目されたテレワークですが、1歳児期、つまり2018年の調査に

比べると、制度そのものも利用する保護者も少しずつ広がっています。**図2**は、職場が育児に理解があるかを聞いています。「定時で帰りやすい雰囲気がある」という父親は、2017年（0歳児期）の調査（図表略）から約15ポイント増加しています。職場環境の変化を受けて、父親の平日の子育て時間も緩やかではありますが、増えています（**図3**）。

「イクメン」という言葉が市民権を得て、それぞれの業界で働き方改革が叫ばれている中、家庭を取り巻く環境は少しずつ育児をしやすい方向に変わっていることが、データからもわかります。しかし現実には、母親の就労などの社会参画が進む一方で、父親の育児参加はまだ不十分といわざるをえません。父親の平日の子育て時間は確かに微増傾向ではあるものの、約4割の父親は「1時間未満」です（**図3**）。子育てにおける母親の役割

は依然として大きく、半数以上の家庭で母親が子育ての8割以上を担当しているという状態も見えます(図4)。

## 「チーム育児」の一員として 高まる園への期待

そうした状況で、園の保育に対する保護者の満足度は、特に保育の評価、子どもの様子、保育者との関係において非常に高く(P.18 図5)、また、子育てで園の先生を頼りにしている割合も親族と同等程度に高くなっています(P.19 図6)。多くの保護者が園の先生方を信頼し、その信頼に先生方が十分に応えていることを、私はみなさんに知っていただきたいと思います。

では、父親の育児への参画が十分とはいえない中、園にはどのようなあり方が求められるのでしょうか。ここでご紹介したいのが「チーム育児」という考え方です。そもそも、人間の子どもは未熟な状態で生まれるため、親の養育の負担が大きく、古来、子育ては、母親・父親だけでなく祖母や子どもの兄・姉、加えて血縁関係のない地域の人たちもサポーターとするような集団共同型でした。国や文化によって違いはありますが、日本においても、家族や親族、地域がチームとなって子どもを育てる集団共同型子育てが行われてきたのです。

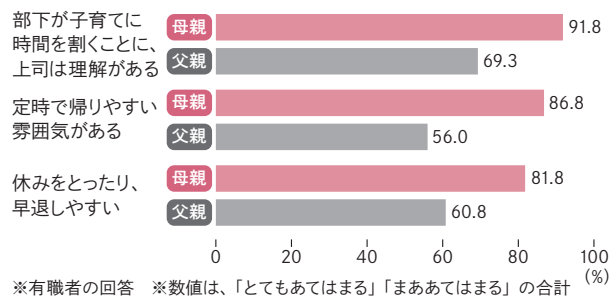
変化が現れ始めたのは1950年代半ばの高度経済成長期からです。父親は働き手、母親は専業主婦として役割が分かれていきました。また、地域と

図1 在宅勤務によるテレワークの制度 (%)

		在宅勤務によるテレワークの制度 (%)				無答不明 (%)
		(制度があるかわからない)	制度はない	制度はあるが、利用したことはない	制度はあり、利用したことがある	
母親	1歳児期	17.5	71.9	4.7	4.9	0.9
	3歳児期	13.5	60.4	6.2	19.5	0.5
父親	1歳児期	14.1	66.1	13.8	4.9	1.1
	3歳児期	8.8	44.1	16.1	30.9	0.1

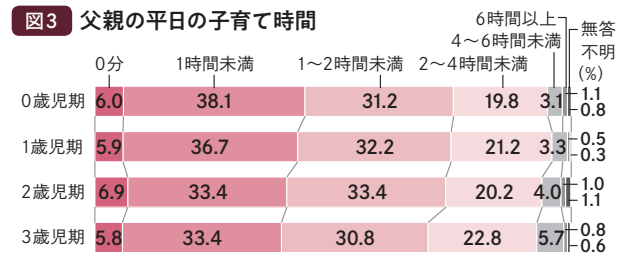
※有職者の回答

図2 職場の様子(3歳児期)



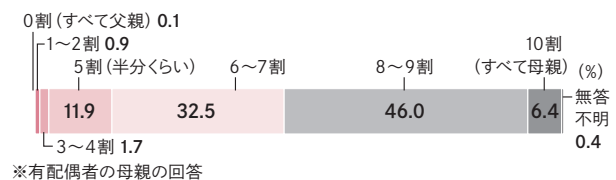
※有職者の回答 ※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計 (%)

図3 父親の平日の子育て時間



※「6時間以上」は「6~10時間未満」「10~15時間未満」「15時間以上」の合計

図4 母親の子育て分担(3歳児期)



※有配偶者の母親の回答

## 「乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017-2020」調査概要

- 調査の実施者** 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(Cedep) ベネッセ教育総合研究所
- 調査の目的** 子どもの生活や保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長・発達とともにどのように変化するかを明らかにする。それにより、よりよい子育てのあり方や家庭でのかわり方について検討することを目的とする
- 調査内容** 子どもの気質や生活、子どもの発達、親のwell-being、親の養

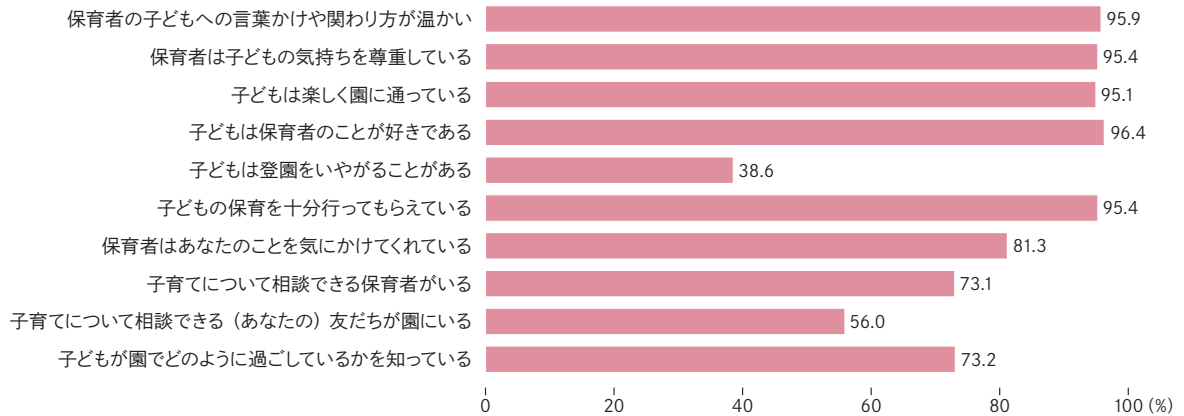
- 育行動や生活、働き方、夫婦関係など
- 調査対象者** 2016年4月2日~2017年4月1日生まれの子どもをもつ家庭3,205世帯(調査モニター)から開始。2020年は2,245世帯を対象に実施
- 実施期間** 2017年9月~10月(子どもの年齢:0歳6か月~1歳5か月)から毎年9月~10月に実施。2020年の調査で4回目
- 調査方法** 郵送調査

調査の内容を  
詳しく知りたい方は  
こちらから!

ベネッセ教育総合研究所ウェブサイト  
東京大学 Cedep・ベネッセ教育総合研究所 共同研究  
「乳幼児の生活と育ちに関する調査」(乳幼児パネル調査)  
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5290>



図5 保育について（3歳児期）



※就園者の回答 ※母親の回答 ※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計

の結びつきが弱くなり核家族化が進む中で、子育てを担う主体も母親へと偏っていきました。このように、母親中心の子育ては近年、急速に根づいたものです。やがて男女雇用機会均等法など社会の枠組みの整備は進んでいきますが、人々の意識の底にある「子どもは母親が育てるもの」という固定観念は払しょくしきれていないのが現状です。特に、幼少期からそうした価値観の中で育った管理職世代に、その傾向が強いように感じます。

このように見ていくと、共働き世帯が増えつつある中で、家庭だけで子育てを担うのは難しいと

いう状況が、保護者の園に対する期待を高めている面もあるかもしれません。しかし、私は、園の役割が「母親や父親の補完」という消極的なものにとどまらなないと考えます。人間が古くから行ってきた「チーム育児」は、家庭内での母親・父親・兄・姉、親族、さらには子どもを取り巻くさまざまな人たちの参画によって成立するものですが、そのメリットとして、子どもが多様な人とかかわり、家庭以外の複数の集団に身を置きながら、成長していけることがあるからです。ですから、園の先生方には「チーム育児」の一員として、家庭とは

### Column 父親の育児参画を阻む「ゲートキーピング」を解消するために、園に期待される役割

パートナーが家事や育児を手伝おうとしたときに、「あなたはやると邪魔になるから手伝わないで」と拒否する行動のことを「ゲートキーピング」といいます。日本では、母親が父親のかかわりをゲートキーピングするケースが多く見られます。ゲートキーピングされた状態は、父親の子育てに向かう気持ちを阻害することが、今回の調査でもわかっています\*。

なぜ、母親はゲートキーピングをしてしまうのでしょうか。要因の1つに、父親のスキルが十分でないことがあるようです。共働きで家事や育児に割ける時間が少ない中では、母親は、スキルのない父親の参加を、「チーム育児」のメンバーとして受け入れることができません。ですから、ゲートキーピングの解消には、父親の育児に関するスキルの向上が必要です。

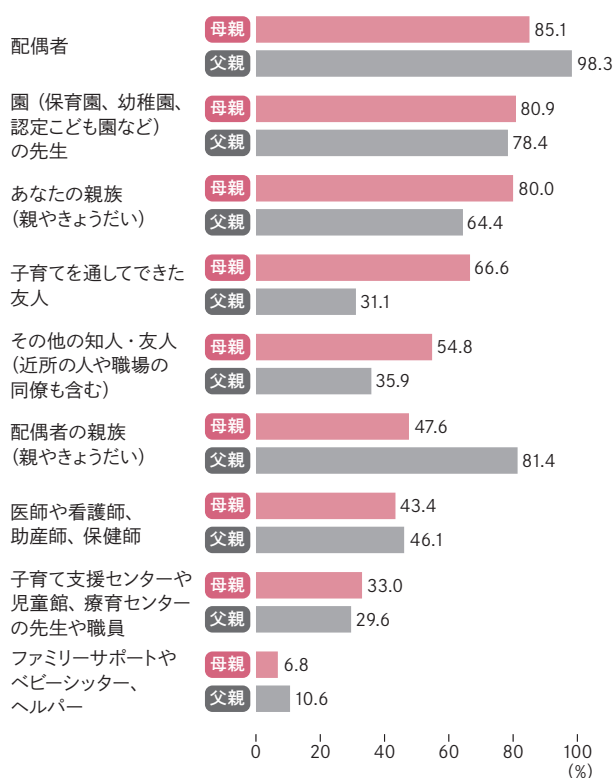
日々、保育に携わり、いわば育児のプロフェッショナルでもある園には、父親の育児スキル向上のためにできることがたくさんあります。例えば、子どもと接する中で子どもの育ちを理解できるようにするために、読み聞かせを体験しても

らうということも挙げられます。コロナ禍で保護者が園に足を運びにくい状況では、園の先生が読み聞かせをしている動画を公開してもよいでしょう。先生方が何気なくしていることがスキル向上の教材になるでしょうし、園の教育資産としても蓄積できると考えます。もう1つのポイントになるのは、できるだけ父親の得意分野のスキル向上を支える、ということです。「チーム育児」のメンバーがバランスよく役割を分担できるようにサポートしていきましょう。

今回の調査では、妊娠中からコミュニケーションができていた夫婦は、ゲートキーピングの状態になりにくく、協動的な育児を進めやすいという結果が出ています。子どもが生まれる前から子育てに関する会話をすることで、父親の育児スキル獲得への意識が高まるのかもしれません。園が行うプレパパ・プレママ教室なども、若い世代の育児スキル獲得を支えることで、人々の意識の底にある固定観念を払拭する一助となる可能性があります。

\*父親が母親のかかわりをゲートキーピングするケースもある。しかし、今回の調査では日本の現状を考えて、母親から父親へのゲートキーピングに焦点をあてて取り上げている。

図6 子育てで頼りにしている存在（3歳児期）



※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計

違う園という場、保護者とは違う保育者という立場で、園の子ども同士のかかわりを生かしながら、子どもの成長を支えていただきたいと思います。

そして、「チーム育児」を通して子どもに育みたい力の1つが「社会情動的発達」（非認知スキル、学びに向かう力などともいいます）です（図7）。社会情動的発達は、人間関係や感情面の賢さにかかわる力で、自分を大切にし、感情をコントロールして自分をよくしていこうとする「自己」にかかわる力と、人の気持ちを理解し、社会のルールを守りながら人と協働する「社会性」にかかわる力という2つの力から成ります。

図7 子どもの社会情動的発達



## 社会情動的発達を支えるため

### 「チーム育児」の一員として保育者に求められること

#### 社会でよりよく生きる力を育む アタッチメント

社会情動的発達は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」と同様、社会の中でよりよい人生を歩いて行く上で必要な力であり、人生を通じて学び続けていくための力です。そして、社会情動的発達を支える際の土台となるのが「アタッチメント」です。アタッチメントは、子どもの社会情動的発達を支える上で、また、「チーム育児」における保育者のあり方を考える上で重要です。

アタッチメントを理解する際に注意したいのは、アタッチメントはスキンシップとは別物だということです。アタッチメントは、子どもが不安や恐怖といったマイナスの感情を抱いたときに、保護

者や保育者など信頼できる人との関係を通して「もう大丈夫」と安心感を得ることです。子どものマイナスの感情を立て直し、安心感を与える大人は、子どもにとって「避難所」ともいえる存在です。

安心感を得た子どもは、1人で冒険や探索を楽しむようになります。その際、大人は、子どもの失敗を先回りして防いだり、後追いをしして処理したりはせず、子どもがそこから元気よく飛び出していける「基地」のように見守ります。こうして、子どもにとって「避難所」と「基地」の機能を果たすのがアタッチメントです（P.20 図8）。

大人が避難所として子どものマイナスの感情を受け止めることで、子どもは自分は愛される価値のある存在だと自覚します。これは、社会情動的発達の「自己」にかかわる力の土台となります。

また、大人が基地として子どもを離れたところから見守ることで、子どもは自発的な遊びに没頭し、1人でいられる力を身につけていきます。そして、「助けて」と言えば人は助けてくれる、いつも自分は見守られているという他者への信頼感は、社会情動的発達「社会性」にかかわる力の土台となります。こうして、アタッチメントの形成が、子どもの社会情動的発達の土台を育むのです。

## 保育者に求められる 避難所と基地のあり方とは

安心感を与え、冒険や探索を見守るという意味では、保護者も保育者も果たす役割は同じです。しかし、「チーム育児」を行う上では、アタッチメントも、家庭とは異なる園ならではの視点で、子どもたちにもたらしていく必要があります。

家庭では保護者と子どもという二者関係でのアタッチメントとなり、一方、園では集団の中でのアタッチメントとなります。集団という場合は、家庭にはありません。そして、子どもは、集団の中で社会性にかかわる多くの要素を身につけていきます。園の先生方には、子ども同士の関係性に目を向けて、集団の相互作用の中で社会性にかかわ

図8 「避難所」と「基地」の機能を果たすアタッチメント



子どもが転んだときに、「痛かったね」と声をかけることもアタッチメントを支える行動の1つです。また、遊びに没頭しながらも子どもが大人の実在を確認するように振り返るときに視線を合わせることで、子どもに安心感を与えることができます。(遠藤先生)

る力を育んでいくことが求められているのです。

自分を無条件に受け入れてくれる大人と出会うことは、子どもが成長する上でとても重要です。園には、家庭でのアタッチメントが不十分な子どももいるかもしれませんが、園の先生方はその役割を十分に果たすことができますし、子どもを取り巻く大人として先生方がアタッチメントを行っていくことも、「チーム育児」の成果だと考えます。

## 保護者の養育スタイルが 社会情動的発達に与える影響

今回の調査では、家庭のしつけ、つまり養育スタイルが子どもの社会情動的発達に影響を及ぼし

図9 幼児期における4つの養育スタイル

### 温かい 応答性

例：子どもが泣いたり喜んだりしているときは、同じ気持ちになって寄り添う／時間があるときは、子どもと一緒に遊ぶようにしている など

### 攻撃性

例：子どもに自分のストレスや怒りをぶつけてしまうことがある／子どもにイライラして、攻撃的に接することがある など

### 許容的で 甘い養育

例：子どもが何か間違っていることをしても、怒ることなく許す／子どもが同じ問題を起こしても、怒ったり怒らなったりする など

### 統制

例：子どもにできないことがあったら、できるようにするまで何度もやらせている／子どもが決まりを破ったときは、次からは守るように何度も言い聞かせる など

図10 子どもの社会情動的発達を支える養育スタイルとアタッチメント(3歳児期)

母親	父親
温かい応答性 +	温かい応答性
攻撃性 -	攻撃性
許容的で甘い養育 -	許容的で甘い養育 -
統制 +	統制
アタッチメント +	アタッチメント +

※「+」は社会情動的発達を促進する関係性を、「-」は抑制する関係性を表す

ているかについても調べています。まず、幼児期の保護者の養育スタイルを「温かい応答性」「攻撃性」「許容的で甘い養育」「統制」の4つに分類しました（図9）。そして、保護者の養育スタイルとアタッチメントが子どもの社会情動的発達にどのように関連しているかを分析したところ、母親の「温かい応答性」と「統制」と「アタッチメント」が促進する方向に、「攻撃性」と「許容的で甘い養育」が抑制する方向に関連していました。父親では、「アタッチメント」が促進する方向に、「許容的で甘い養育」が抑制する方向に関連していました（図10）。

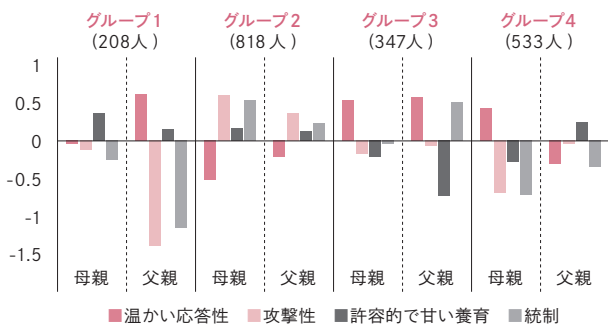
さらに、父親と母親の養育スタイルの組み合わせについても分析しました（図11）。すると、社会情動的発達に関する得点が高い傾向にあるのは、「温かい応答性」を父親と母親の両方が維持した上

で、父親が「統制」を行ったグループ3だということもわかりました。

保護者のアタッチメントは子どもにとっての避難所や基地となりますが、それは優しい養育スタイルだけで担える役割ではありません。「温かい応答性」をベースに、悪いことは悪いと毅然とした態度をとり、秩序をもたらし存在として子どもに接することが、子どもの成長を促し、社会情動的発達を支えることへとつながっていくのだと思います（図12）。

もちろん、「統制」を発揮するのは、父親ではなく、母親でもよいでしょう。大切なのは、「温かい応答性」を父親と母親がともに維持していることで、その上で、父親と母親がチームとして得意な役割を担えばよいのです。

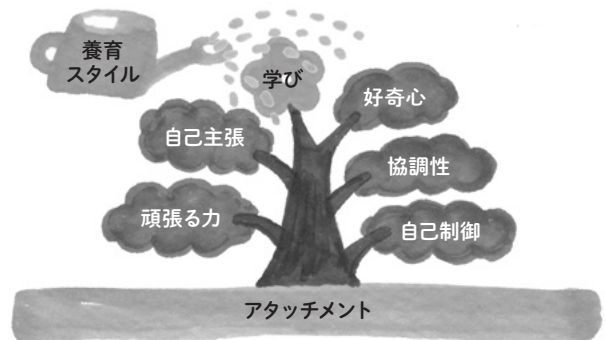
図11 養育スタイルの組み合わせ（3歳児期）



パートナー同士の養育スタイルの方向性（高低）

- グループ1 父親の「温かい応答性」が高い
- グループ2 母親と父親の「温かい応答性」が低い
- グループ3 母親と父親の「温かい応答性」が高い  
父親の「統制」が母親より高い
- グループ4 母親の「温かい応答性」が高い  
父親の「許容的で甘い養育」が高い

図12 子どもの社会情動的発達を支えるもの



アタッチメントは、子どもに社会情動的発達を根づかせるための土壌です。そして、水やりなどの養育スタイルにより、子どもの社会情動的発達は支えられ、伸びていきます。（遠藤先生）

園の先生方へ

園の先生方が「チーム育児」という視点をもつことで、保護者にかける具体的な言葉や見守る姿勢は、おのずと変わってくるはずですが、また、先生方の子どもたちへの援助も、集団生活を通じた社会性にかかわる力の育成という観点に立てば、今後もいろいろな工夫ができるでしょう。

そして、先生方が「子育ては、みんなで力を合わせて行うもの」という信念をもって子どもたちと接することで、子どもたちは先生方の言動を通して、「男だから・女だから、こうあるべき」といった古い価値観にとらわれない自由な生き方を学ぶはずですが、園の先生方が「チーム育児」の視点をもって保護者、そして、子どもと接することは、子どもたちが形づくる新しい社会という未来を切り開くことにつながるのだと思います。

## 刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。



## 「これからの幼児教育」バックナンバー

2020 (秋) | 特集 | 変わる保育・変わらない保育

2020 (春) | 特集 | 全国調査から浮かび上がる保育の課題と解決のヒント

2019 (秋) | 特集 | 段差を連続性に！ ともに育てる保幼小接続

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っていません。

◎WEBサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードできます。

ベネッセ これからの幼児教育 検索

<https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/>